

新聞 4 コマ漫画が描く麻生太郎首相（後編）

首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2008～2009

Prime Minister Taro Aso in Newspaper Comic Strips (Part 3): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2008-2009

水野 剛也・福田 朋実

Takeya Mizuno, Tomomi Fukuda,

木野村樹里・志賀 俊之

Juri Kinomura, Toshiyuki Shiga,

菅原 想・千田 一輝

Omoi Sugawara, Kazuki Chida

はじめに 前編・中編の要約と後編のねらい

本論文は、麻生太郎首相の在任期間中（2008年 9 月24日～2009年 9 月16日）に 3 大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての 4 コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前々号（第48巻・第 2 号、2011年 3 月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、本誌前号（第49巻・第 1 号、2012年 1 月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析した。

本号に掲載する後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析し、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。なお、論文末には付録として麻生内閣の略年表を添付してある。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前々号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前々号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く麻生首相

- ・アサッテ君（東海林さだお）『毎日新聞』（朝刊）
- ・ウチの場合は（森下裕美）『毎日新聞』（夕刊） 本誌前号（中編）に掲載。
- ・コボちゃん（植田まさし）『読売新聞』（朝刊）

- ・ののちゃん（いしいひさいち）『朝日新聞』（朝刊）

『朝日新聞』の朝刊で連載されている「ののちゃん」（いしいひさいち）は、主人公・山田ののちの家族を中心として、家庭や学校における彼らの日常生活を描く家庭的な4コマ漫画である。山田家は5人家族で、会社員の父親・たかし、専業主婦の母親・まつ子、中学生の長男・のぼる、小学3年生の長女・ののち、祖母・山野しげ、からなる。無愛想で散歩嫌いの飼犬・ポチもいる。2009年の作者のインタビューによると、漫画の舞台は自身の出身地（岡山県玉野市）をモデルにした「たまの市」であるという。²⁷

「ののちゃん」は、その前身「となりのやまだ君」を改題した作品で、本論文執筆時点（2011年11月）でも5,100回を超えて継続中である。「となりのやまだ君」は1991年10月から1,935回の連載をかさね、1997年4月に「ののちゃん」に改題された。「となりのやまだ君」を含めれば、連載は20年、7,000回を超える。その間、新聞以外の媒体にも進出し、1999年7月には「ホーホケキョ となりの山田くん」として映画でアニメ化、2001年7月から2002年9月にかけてはテレビでもアニメ化されている。²⁸

作者・いしいひさいち（本名・石井壽一）は、4コマ漫画を中心に多方面で活躍している漫画家で、「現代の4コマ漫画発展に大きな功績を残した一人」と評価する研究者もいるほどの第一人者である。1951年うまれのいしいは、関西大学で漫画同好会に所属し、デビュー作は在学中の1972年から求人情報誌『日刊アルバイトパートタイマー情報』に連載した「Oh! バイトくん」であった。1976年に大学を卒業後は次々にヒットを飛ばし、代表作として「がんばれ!! タブチくん!!」（『漫画アクション』）、「経済外論」（『朝日新聞』）、「コミカル・ミステリー・ツアー」（『ミステリーズ!』）などがある。受賞歴も多く、第31回文藝春秋漫画賞（1985年）、第32回日本漫画家協会賞大賞（2003年）、第54回菊池寛賞（2006年）、などがある。2003年には「ののちゃん」で第7回手塚治虫文化賞短編賞を受賞している。²⁹

作品の質的分析に移ると、麻生の在任期間中、「ののちゃん」で首相を描いた作品は1本もなかった（348本中0本）。本論文が分析対象とした他の新聞4コマ漫画では、「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）と「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）も首相を描いていない。

先行研究（本論文前編・後注4参照）が指摘しているように、「ののちゃん」は「きわめて家庭色

が強い漫画で、政治や政治家がほとんど登場しない」という特徴をもつため、麻生を描いた作品が存在しなかったことも驚くにはあたらない。過去の首相を見ると、5年5ヵ月の在任期間中、小泉を描いた作品は1,927本中わずか4本（0.20%）しかなかった。しかも、その4本のうち2本は「番外作品」（番号が付されていない作品）であった。つづく安倍・福田政権時には首相を描いた作品は皆無（安倍＝354本中0本、福田＝355本中0本）で、両首相とも1度も描かなかったのは、3大紙の4コマ漫画では「ののちゃん」だけであった。つまり、小泉から麻生までの約8年5ヵ月間を通じて、本論文の定義に合致する方法で首相を描いたのは4本、しかもそのすべてが小泉を描いているわけである。「首相が登場することはめったにない」と先行研究が特徴づけているように、麻生を描いた作品が1本もなかったことは、これまでの傾向に照らせば何ら不自然ではない。なお、小泉政権時にあった「番外作品」は、安倍・福田・麻生の在任期間中には掲載されていない。

ただし、本論文にとって留意すべきは、少なくとも麻生の在任期間中の「ののちゃん」は、単に首相を描かなかったばかりか、多少とも首相に関連する言動や政治的な話題さえ取りあげることがなかった、という点である。先行研究は必ずしも同じような知見を示していない。たとえば、首相を描いたわけではないが、安倍の在任期間中には安倍内閣のスローガン「再チャレンジ」を題材とする作品が1本（2008年1月14日号、No.3823）あった。また、麻生を描かなかった他の家庭漫画に目を転じて、「ののちゃん」ほど政治家や政治問題と無関係というわけではない。本論文の中編（本誌前号掲載）で検討したように、「ウチの場合は」には麻生内閣の閣僚と推察される政治家の無責任さを批判する作品が1本あったし、「コボちゃん」にも政治家の世襲や選挙、そして政権交代を描いた作品が複数あった。首相を登場させなかった点は同じでも、麻生政権時の「ののちゃん」は他の4コマ漫画と比べとりわけ政治的なテーマと距離があったといえる。

本論文が上述の点に着目するのは、作者のいしいが本来、政治を含む時事的な問題にまったく無関心な漫画家ではないからである。漫画研究者の山口佐栄子も指摘しているように、いしいが描いてきた4コマ漫画のテーマは「政治経済、時事問題から哲学まで、多岐にわたる」。先行研究も、数こそ少ないが小泉を描いた作品は「痛烈な政治風刺を効かせ、意図して批判的な文脈で首相を描いている」と分析し、そのために「ののちゃん」を「純家庭的4コマ漫画」ではなく、まれに鋭い政治批評・風刺をすることもある「家庭的4コマ漫画」として特徴づけている。小泉政権以降、全国3大紙の4コマ漫画のなかで唯一「番外作品」を掲載している事実も、政治問題や現実社会で起きている出来事に作者が一定の注意を払っている証左と見ることができる。しかし、その特徴は麻生の在任期間中にはまったく表出しなかった。むしろ、「純家庭的4コマ漫画」である「ウチの場合は」と「コボちゃん」よりもさらに「純家庭的」であったとさえいえる。³⁰

もっとも、先行研究が指摘しているように、「ののちゃん」は「意図的に政治問題を避け、あえて家庭的な漫画に徹している」と考えられるため、本論文の知見だけをもって他の「純家庭的4コマ漫画」と同列に位置づけるのは早計である。作者のいしいは連載3,000回を迎えた際に、「世の中がどうなろうと『しらんぷり』が『ののちゃん』の基本です」と語っている。その言葉を借りれば、安倍・

福田に引きつづき、麻生の在任期間中にも「しらんぷり」している作者をふりむかせるほどの出来事は起きなかったといえる。麻生は家庭漫画で取りあげられてもおかしくない話題を多く提供した首相であった。たとえば、高級ホテルのバー通い、漢字の誤読、閣僚の失態、支持率が低下・低迷しつづけた末の衆議院解散と総選挙、そして選挙での大敗と政権交代、などである。実際に、そのなかのいくつかは「ウチの場合は」と「コボちゃん」で作品の題材となっている。見方を変えれば、それでもなお「しらんぷり」しつづけたことこそ、他の家庭漫画と一線を画す「ののちゃん」の独自性だといえるかもしれない。³¹

もちろん、「ののちゃん」の首相描写には未知の部分がなお多く残されており、さらなる研究の積みあげが不可欠であることはいうまでもない。本論文執筆時点までに、麻生の自民党から政権を奪った民主党の鳩山由紀夫を描いた作品が少なくとも1本(2010年4月21日号、No. 4533)ある。この作品を含め、鳩山の在任期間中の分析は喫緊の課題である。また、鳩山の後任の菅直人と野田佳彦、さらにそれ以降、いしいの意図的な無関心を途切れさせる首相が出現するのかどうか、継続的に注視していく必要がある。前身の「となりのやまだ君」から連載20年を迎えた際、作者は「新聞まんがだからこの程度がよいとか、いつも同じがよいとは考えません」と書いている。今後、また突然に政治風刺性を発揮して首相を描く可能性も十分にある。³²

他方、小泉以前の首相に研究範囲を広げることも、突破口を開く有力な手段となりえる。そうすることで、「ののちゃん」の首相描写はもちろんのこと、本論文の前編と中編で指摘した家庭的4コマ漫画の首相描写と社会的注目度に関する仮説についても、理論化にむけて有用な材料が得られるかもしれない。

・地球防衛家のヒトビト(しりあがり寿)『朝日新聞』(夕刊)

『朝日新聞』の夕刊で連載されている「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)は、家庭的な要素を多分に含みながらも旺盛な時事性・風刺性を特徴とする4コマ漫画である。「地球防衛家」は、会社員の父親・トーサン、専業主婦の母親・カーサン、会社員の長女・ムスメ、小学生の長男・ムスコからなる4人家族で、作者自身の説明によれば、「フツウの生活を送りながらも、世の中をよくしたいと正義感に燃える、いわばどこにでもいるような家族」である。彼ら以外にも、近所の人々、会社の上司や同僚、学校の先生や同級生、皮肉屋の「カエル」など、多彩なキャラクターが登場する。後述するように、首相も頻繁に登場し、常連の1人だといっても過言ではない。連載がはじまったのは小泉政権時の2002年4月で、本論文執筆時点(2011年11月)でも継続中である。³³

作者のしりあがり寿(本名・望月^{としき}寿城)は、新聞4コマ漫画に限らず多領域で活躍している漫画家である。1958年に静岡県静岡市でうまれたしりあがりは、1981年に多摩美術大学を卒業後、ビール会社に勤めながら漫画を執筆・発表しつづけた。1994年に退職後は漫画家業に専念している。他の代表作に、『流星課長』(竹書房、1996年)、『ヒゲのOL 薮内笹子』(竹書房、1996年)、『時事おやじ2000』(アスキー、2000年)、『弥次喜多 in DEEP』(エンターブレイン、2000年)、などがある。2011

年3月の東日本大震災に際しては、直後から関連する諸問題を積極的に漫画化し、同年中に『あの日からのマンガ』（エンターブレイン、2011年）を出版している。また、自身の仕事について論じた著作『表現したい人のためのマンガ入門』（講談社現代新書、2006年）やエッセー集『人並みといふこと』（大和書房、2008年）もある。第46回文藝春秋漫画賞（2000年）、第5回手塚治虫文化賞マンガ優秀賞（2001年）、第15回文化庁メディア芸術祭優秀賞（2011年）などの受賞歴、そして神戸芸術工科大学などで教歴もある。

麻生の在任期間中、3大全国紙の4コマ漫画のなかでもっとも多く首相を描いたのが「地球防衛家のヒトビト」であった。頻度・本数（4.86%＝288本中14本）とも、「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）のそれ（2.38%＝335本中8本）を大きく上回り、頻度では2倍以上、本数でも1.7倍以上引き離している。平均すれば1ヵ月に少なくとも1度は首相を描いている計算で、常連の登場人物だといえる。「アサッテ君」とともに、先行研究が「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分にうなずける。他方、3つの家庭的4コマ漫画、「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）、「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）、「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）は首相をまったく描いておらず、その差は歴然としている。³⁴

首相を描くことに対する「地球防衛家のヒトビト」の積極性は先行研究もくり返し指摘しているが、その特徴は麻生の在任期間中にいっそう顕著になっている。前任の3人の首相とは在任期間が異なるため頻度を比較すると、小泉は3.10%（1,320本中41本）、安倍は3.72%（295本中11本）、福田は2.72%（294本中8本）の作品で描かれており、麻生の4.86%は他の誰よりも高い。連載開始以来、どの首相も比較的の高い頻度で取りあげられているが、なかでも麻生はもっとも「描かれやすい」首相であったことがわかる。麻生の「描かれやすさ」は、本論文の中編で指摘したように「アサッテ君」でも認められた。高級ホテルのバー通いや漢字の読み間違いなど、社会の耳目を集める言動が多かったこと、かつそれらが批評・風刺する題材として適していたことが、麻生を両時事漫画にとって「描かれやすい」首相にした有力な要因だと考えられる。追加的に、「アサッテ君」とならび「地球防衛家のヒトビト」は首相に就任する以前から麻生を批判的な文脈で描いている。この点はあらためて詳説する。また、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別して特徴づけているが、この点についても後述する。³⁵

次に、麻生を描いた作品の質的な分析に移るが、そこで有用なのが小泉・安倍・福田の作品分析で先行研究が使っている準拠枠である。その枠組によれば、「地球防衛家のヒトビト」は「自己主張型」の時事的4コマ漫画であり、首相の描き方のもっとも根本的な特徴は、首相の実際の言動や政策を主題とし、かつ強烈な風刺・批判を浴びせる、という点であった。この旺盛な時事性と風刺性を下地としていくつかの表現パターンが見られたが、麻生の作品を分析する上でも、先行研究が見いだした以下の諸点は引きつづき有効である。

1 地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる。

- 2 他の政治家（海外の政治家も含む）と対比・並列して首相を描く。
- 3 非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる。
- 4 作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する。

以後、作品の分析は上述の諸点を軸にすすめる。なお、「地球防衛家のヒトビト」では1本の作品に複数の表現パターンが混在している場合が多く、「アサッテ君」ほどははっきりとは類型化しにくい点をあわせて指摘しておく。

まず、麻生を描いた14本のすべてが、程度の差こそあれ、現実にあった首相の言動や政策をテーマに何らかの政治的風刺・批判を展開している点は、「地球防衛家のヒトビト」の作品全般に通底するもっとも基本的、かつ重要な特徴として注視に値する。定額給付金を扱った2008年11月1日号の作品（図16）はその典型例で、経済刺激策としても選挙対策としても首相が意図する効果はもたらさないだろうと皮肉る内容である。「麻生サンタ」が「みんなに現金のプレゼント」（2コマ）をしてくれても、トーサンは「もちろん貯金♡」（3コマ）するし、選挙で与党に投票するかと問われても「それとこれとは別♡」（4コマ）と取りつく島もない。ことごとくねらいが裏目にでていることにカーサンが「麻生さんがカワイソウになってきた…」（4コマ）と同情することで、皮肉がよりいっそう強められている。なお、この作品には一般庶民が首相を語る第1のパターンと架空の状況で首相を滑稽に描く第3のパターン（「麻生サンタ」）の両方が混在している。

上の作品も含め、「地球防衛家のヒトビト」では主人公一家をはじめ一般庶民が実に饒舌に首相について論評する。この特徴は、首相を描いた作品に限らず、「地球防衛家のヒトビト」全体に見られる独自性の1つである。この点について漫画史研究者の清水勲は、「この作品は複雑多様化した現代の世相や政治を諷刺するためにセリフを多用し、成功している。現在、最も活力に満ちた新聞四コマの一つである」と評している。³⁶

実際、庶民が活発に首相を語るという第1の表現方法は、麻生を描いた14本の作品のほとんどで認められる。首相就任後はじめて麻生を描いた2008年10月25日号の作品（図17）はその典型例で、首相の高級パー通いの是非についてトーサンとカーサンが激しく議論し（1～3コマ）、さらにムスコとその友人も冷ややかに意見をのべあっている（4コマ）。他の4コマ漫画で、登場人物がこれほど積極的に首相について言葉を交わすことはない。比類なき彼らの饒舌さは、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることを補強する特徴の1つでもある。補足的に、この作品にもフィクショナルな姿で首相を滑稽に描く第3の表現パターンが見られる。「国会でキビシイ顔で飲[酒]」する首相（3コマ）がそれである。

上述の点に関連して、「子供」の視点で大人社会のリーダーである首相を痛烈に皮肉るのも「地球防衛家のヒトビト」ならではの特徴である。図17のオチは大人の議論ではなく、ムスコたち小学生の本質を突くような素朴な疑問である。詳しい分析は割愛するが、2008年12月9日号の作品でも「子供」の視点が活用されている。そこでは、「マンガがスキ」で「いまだに漢字まちがえる」という新

地球防衛家の ヒトビト

しいあがり

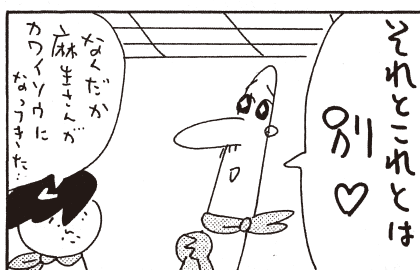
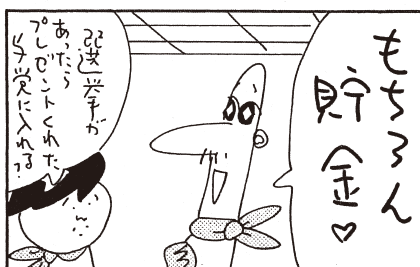
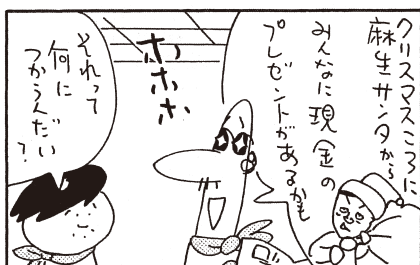
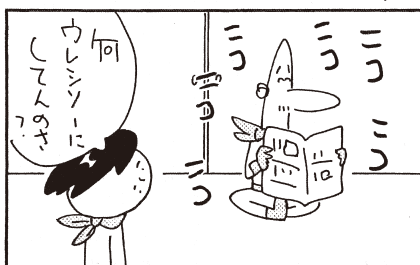


図16 2008年11月1日号

地球防衛家の ヒトビト

しいあがり

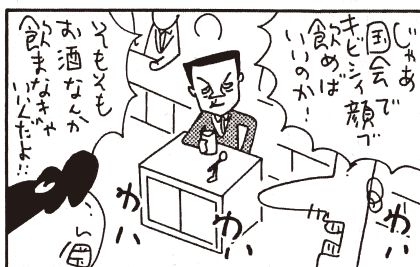
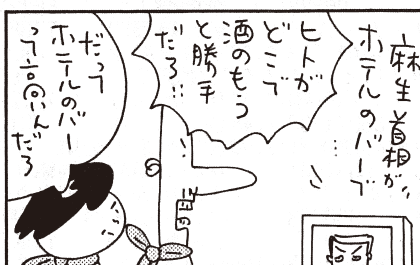


図17 2008年10月25日号

任の教師に、子供たちが「そんなの先生じゃない」と文句をいっている。最高権力者である首相の言動を、あえて社会的地位では対極にある「子供」の立場からとらえることで、批評・風刺の効果を高めていると考えられる。安倍・福田の任期中にはそれほど顕著でなかったが、小泉政権時にもムスコたちが首相を鋭く批判する作品が複数あった。「地球防衛家のヒトビト」では、小学生を含め老若男女が積極的に首相を批評・風刺する。

なお、図17で登場人物はマス・メディアの報道をきっかけに首相を語っているが（見方によっては図16も同様）、新聞やテレビが伝える首相を庶民が見る・語るという構図は、「地球防衛家のヒトビト」に限らず他の新聞4コマ漫画にも共通して見られる注目すべき特徴である。この点は本論文の中編で「アサッテ君」や「ウチの場合は」を分析した際にも言及したし、先行研究もくり返し指摘している。図17以外でも、少なくとも3本（図18＝2008年12月13日号、2009年7月2日号、2009年7月15日号）の作品でマス・メディアを媒介として首相が登場している。この点は結論であらためて言及する。

つづいて、他の政治家（海外の政治家も含む）と対比・並列して首相を描く第2の表現パターンも、少なくとも4本の作品で認められた。先行研究が指摘するように、小泉・安倍・福田の在任期間中は、この手法は「地球防衛家のヒトビト」だけに見られる独自の特徴であった。ところが、麻生の在任期間中に限っては、1本だけではあるが「アサッテ君」にもアメリカのバラク・オバマ大統領と対比させて麻生を描く作品（本論文中編・図6）があった。しかし、以下で例示するように、「地球防衛家のヒトビト」はより多くの作品で他の政治家とともに首相を描いており、このパターンを得意としている点は変わらない。

わかりやすいのは2008年12月13日号の作品（図18）で、消費税をめぐる議論を主題として、前任の安倍晋三と福田康夫を登場させた上で現職の麻生をテレビ画面のなかに描いている。それ以前の自民党政権は、支持率の低下などを懸念し消費税率の引き上げについて踏み込んだ姿勢を示せずにいた。これに対し、麻生首相は「3年後」（2011年）の増税をめざす考えを表明していた。トーサンが「いろんな人から」「何度も何度も同じようなこと聞いてるけど」「おっ ついに時期までふみこんだ！！」（1～3コマ）と驚いているのは、それゆえである。しかしその後、連立を組む自民党と公明党は首相の意向に応じず、税制改正の道筋を示す「中期プログラム」で増税の時期を明記しないことを決めてしまった。トーサンの「おっ戻った…」（4コマ）は、そのニュースに対する反応である。この作品で着目すべきは、消費税をめぐる首相の指導力不足を風刺していることもさることながら、麻生を過去の2人の首相とともに登場させている点である。少なくとも小泉政権以降、現職を含め複数の首相経験者を1本の作品で描いているのは「地球防衛家のヒトビト」だけである。首相を描くことにおいて「地球防衛家のヒトビト」がいかに突出しているかを象徴する作品である。³⁷

もう一例、2009年2月21日号の作品（図19）も他の政治家と対比・並列して首相を描いている。ここでは、麻生を小泉純一郎元首相と中川昭一財務・金融担当大臣と同列に置き、彼らを「たのもし」（2コマ）野球のWBC（World Baseball Classic）日本代表選手と対比させている。最後にトーサンが「こちらもある意味 日本代表なんだけどなー」（4コマ）と困った様子で苦言を呈することで、国民のリーダーである首相らを辛辣に風刺している。図18の安倍と福田につづき、この作品ではもう1人の元首相である小泉を登場させているが、これも首相を描くことに対する「地球防衛家のヒトビト」の積極性を例証している。小泉は安倍政権時にも1本の作品（2007年7月5日号）に登場している。この漫画が描く「首相」は、必ずしも現職だけにとどまらない。さらに補足として、3大全

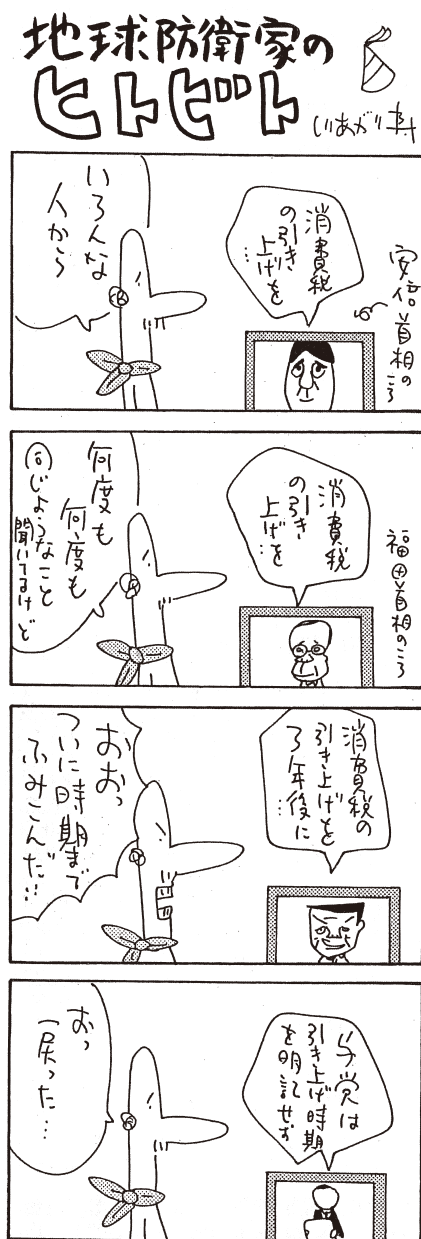


図18 2008年12月13日号

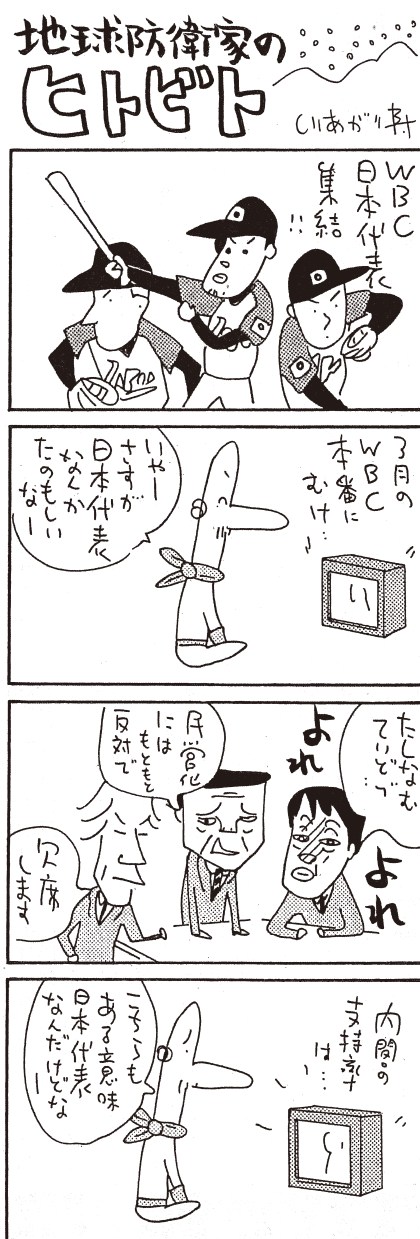


図19 2009年2月21日号

国紙の4コマ漫画では唯一、「地球防衛家のヒトヒト」だけが麻生の在任期間中に次の首相となる鳩山由紀夫を描いている。この点はあらためて論じる。³⁸

参考までに図19の背景について説明しておく、3コマ目の3人の台詞はいずれも実際にあった発言にもとづいている。まず、麻生は2009年2月5日の衆議院予算委員会で、「[小泉内閣で総務大臣だった際] 郵政民営化……賛成じゃありませんでした。……しかし、私は内閣の一員ですから、最終



図20 2008年11月15日号

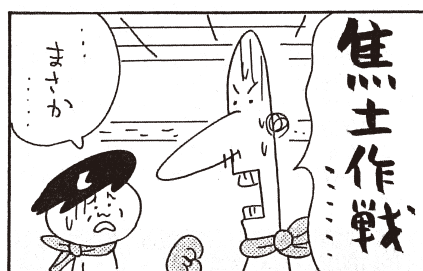
はイメージ回復のため東京の居酒屋で大学生と懇談したが、その直後に本来なら焼いて食べるホッケの「煮つけ」がでたとのべ、かえって庶民感覚を疑われる事態を招いていた。いずれにせよ、執務室で肘をついて試験問題を解く首相は架空の姿で、みずからの不用意な発言でつまづく麻生を皮肉っていることは間違いない。

架空の状況設定で首相を皮肉る作品が多い（少なくとも7本）点で、「地球防衛家のヒトビト」は

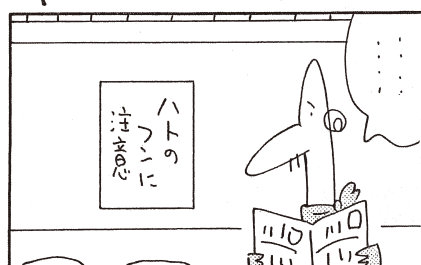
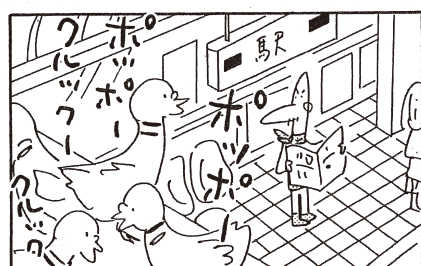
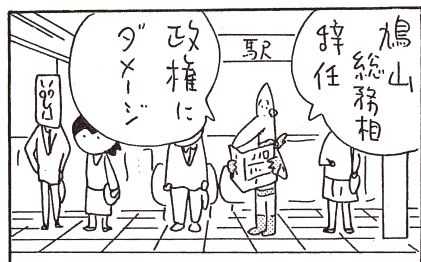
的に賛成した」と答弁し批判を浴びていた。麻生の発言に反発するように、首相として郵政民営化を実現させた小泉は2月18日（モスクワ現地）、定額給付金の財源を確保するための第2次補正予算関連法案の衆議院での再議決に欠席すると表明していた。最後に、中川は主要7カ国財務相・中央銀行総裁会議（G7）に出席後の2月14日（ローマ現地）、ろれつの回らぬ状態で「もうろう記者会見」をして批判されていた。会見前の昼食会でワインを「たしなむ程度で口にちょっと含んだ」と釈明していたが、2月17日には財務・金融担当大臣を引責辞任してしまった。なお、中川の辞任を受けて『朝日新聞』が緊急に実施した全国世論調査では、麻生内閣の支持率は退任するまでの全期間を通じて最低の13%を記録していた。「内閣の支持率は…」(4コマ)はそのことを示していると考えられる。³⁹

次に、非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる第3の表現パターンは、少なくとも7本の作品で見られた。すでに分析した作品では、定額給付金を配る「麻生サンタ」(図16)や「国会でキビシイ顔で飲[酒]」する首相(図17)にこの表現方法が認められる。

図16・17以外にも、よりわかりやすい構図で首相をフィクショナルに、かつ滑稽に描いている作品がある。2008年11月15日号の作品(図20)はその1つで、流行している検定試験を題材に、「漢字検定」(2コマ)と「庶民検定」(4コマ)にむけて受験勉強に励む想像上の麻生を描いている。「漢字検定」は実際に存在し、首相の漢字誤読を揶揄しているが、「庶民検定」にいたっては検定自体が架空のものである。ただし、「ほっけ」「煮魚」は実際にあった首相の発言をさしている。高級バー通いを批判された首相



地球防衛家の
ヒトビト



悪意に満ちた発言であり、トーサンの「焦土作戦……」(4コマ)とあわせ、「水膨れ」「バラマキ」と批判された予算編成を1コマ漫画がするように強く非難している。⁴⁰

2009年6月16日号の作品(図22)も同様に、1コマの風刺漫画のようなフィクショナルな状況設定で首相を皮肉っている。ここで題材となっている事実は、日本郵政の社長人事をめぐり首相と対立していた鳩山邦夫が6月12日に総務大臣を辞任したことである。鳩山の辞任は事実上の更迭で、「政権

にダメージ」(1コマ)を与える出来事として大きく報道されていた。トーサンの想像のなかで首相が「ハトのフン」を頭に落とされ、「あのヤロ〜」(4コマ)と悔しがっているのは、そのことを揶揄している。なお、この作品では他の政治家と対比・並列させる第2の表現パターンも併用されている。⁴¹

最後の第4のパターン、作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する作品には1本だけが該当した。「自己主張型」の時事的4コマ漫画とはいえ、この描き方が採用されるのはまれで、過去には小泉・安倍政権時に1本ずつ(2005年10月20日号、2007年9月13日号)あっただけである。それだけに、たとえ1本でも麻生の任期中にナレーションを使って首相を描いた作品があったことは注視に値する。2009年7月22日号の作品(図23)がそれで、以下のような内容である。

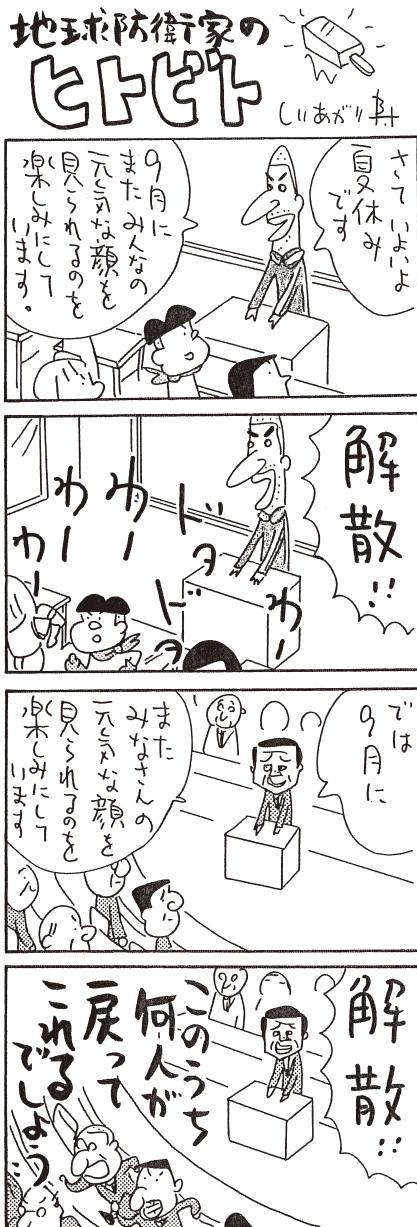


図23 2009年7月22日号

- ・小学校の教室で先生が、「9月にまたみんなの元気な顔を見られるのを楽しみにしています」「解散!!」と宣言すると、ムスコたちが一斉に席を立つ(1~2コマ)
- ・国会らしき場所で麻生が、「では9月に」「またみなさんの元気な顔を見られるのを楽しみにしています」「解散!!」と宣言すると、議員らしき人たちが一斉に席を立つ(3~4コマ)
- ・作者のナレーション「このうち何人が戻ってこれるでしょう…」(4コマ)

衆議院が解散したのはこの作品が掲載された前日の7月21日で、総選挙は8月30日に執行されることが決定して

いた。きたる総選挙は激戦が予想され、とくに麻生が所属する自民党の立候補者は苦戦を強いられる、という政治風刺である。

この作品で注目すべきは、「このうち何人が戻ってこれるでしょう…」(4コマ)という文章が登場人物の台詞ではなく作者自身のナレーションとして提示されている点で、漫画という形式をとってはいるが、ほとんど作者自身の意見表明と読むことができる。作者は皮肉屋の「カエル」に自身の見解を代弁させることもあり、過去には小泉政権時に2本(2004年5月7日号、2005年3月9日号)、福田政権時に1本(2008年9月5日号)で「カエル」を登場させて首相を描いている。しかし、図23では「カエル」という代弁者さえ通さず、ほぼそのまま直接的な評論をしている。これは他のどの漫画にも見られぬ「地球防衛家のヒトビト」独自の表現方法であり、1本だけとはいえ、「自己主張型」の真骨頂を示す作品である。なお、麻生の在任期間中には「カエル」を使って首相を批評・風刺する作品は1本もなかった。補足的に、図23で首相が「解散!!」(3コマ)と叫んでいるのは架空の出来事であるから、第3の表現パターンも同時に使われていることになる。

ところで、麻生が「描かれやすい」首相であったことを理解する上で、首相に就任する以前から作者が批判的な文脈で麻生を描いている事実は見逃せない。本論文の定義に合致する方法で首相就任以前の麻生を描いている作品は2本あるが、そのどちらにも就任後の「描かれやすさ」を予感させるような批評性・風刺性が認められる。

まず、2007年9月26日号(図24)の作品では、福田首相が誕生した当日にもかかわらず、首相になれなかった麻生が主役の座を占め、しかも揶揄の対象とされている。安倍の辞任表明後の自民党総裁選で福田に破れた麻生が、「勇者」気どりで「よーし復活の呪文だーっ!!」(3～4コマ)と調子にのるが、秘書らしき人物に「マンガやゲームのやりすぎですよ」(4コマ)とたしなめられる、という内容である。麻生が「マンガ」好きであることは、就任後の2008年12月9日号の作品でも風刺されている。落選した麻生が、選挙の勝者である福田を押しつけ作品の中心人物として描かれていることとあわせ、この時点ですでに「描かれやすさ」の片鱗が見られる。

もう1つ、2008年9月19日号(図25)の作品では、福田の辞任表明後、ふたたび総裁選に出馬した麻生が他の立候補者とともに、やはり批判的な文脈で描かれている。麻生個人に焦点をあてているわけではないが、有力な首相候補者として描いていることは間違いなく、しかも「このサワギ」(4コマ)は限定的で大した影響力はもたないという政治風刺が見られる。麻生は「アサッテ君」でも自民党総裁選の立候補者の1人として描かれていた(本論文中編・図8)。安倍に破れた2006年を含め、麻生が3年連続で自民党総裁選に出馬したことが就任後の「描かれやすさ」につながっているとも考えられる。いずれにせよ、麻生は就任した途端に「描かれやすい」首相になったわけではなく、それ以前、首相候補者のときから作者の気を引く存在であったといえる。⁴²

上の2本の作品は、本論文だけでなく後続の研究にとっても無視できない意味をもっている。麻生に限らず4コマ漫画の首相描写を十全に理解するためには、その首相の在任期間中だけを見ているのでは不十分で、就任以前にさかのぼる連続的な流れを把握する必要があることを示すからである。同



図24 2007年9月26日号

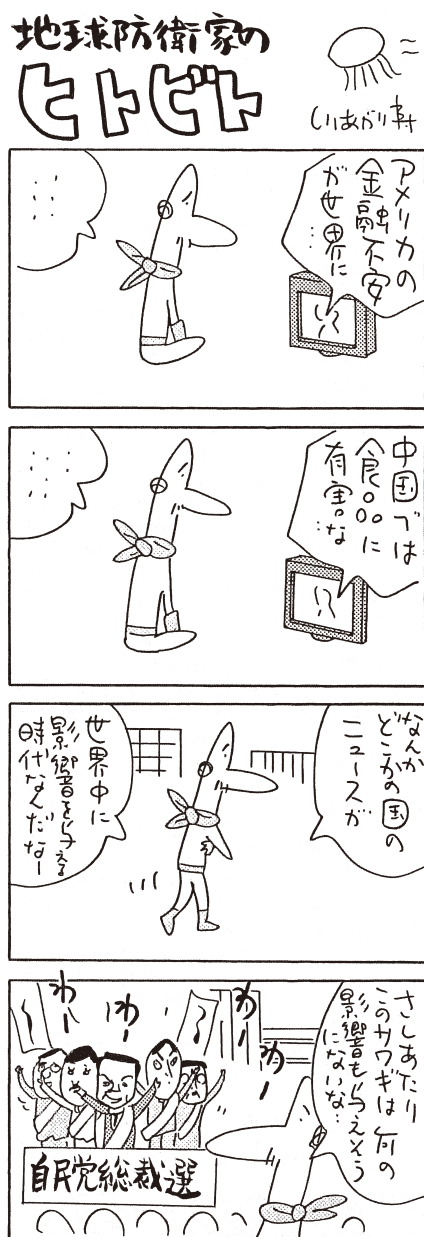


図25 2008年9月19日号

じことは本論文の中編で「アサッテ君」を分析した際にも指摘した。今後の研究では、とくに政治家や政治問題を頻繁に扱う時事的4コマ漫画を分析する上で、首相就任以前の作品は見落とすことのできない重要な論点の1つとなるであろう。事例によっては、離職後の描かれ方にまで目を配る必要もでてくるかもしれない。⁴³

上述の点に関連して、3大全国紙の4コマ漫画では唯一、「地球防衛家のヒトビト」だけが「次

期」首相である鳩山由紀夫を麻生の在任期間中に描いている。本論文の目的とはやや離れるが、言及に値する特徴がいくつか見られるし、将来の研究につながる内容でもあるため、それらの作品を以下で簡潔に紹介しておく。

まず、2009年9月16日の首相就任以前（2010年6月8日に離職）、本論文の定義に合致する方法で鳩山を描いた作品は実に5本もあった。この事実は、就任以前に2本の作品で描かれた麻生よりも、鳩山がさらに「描かれやすい」首相であった可能性を強く示唆する。また、すでに指摘したように、麻生の在任期間中には現職の麻生だけでなく、首相経験者の小泉・安倍・福田も登場している。つまり、次期首相の鳩山も含めれば、5代にわたる首相全員が描かれているわけである。在職中であるか否かを問わず、「首相」を描くことに対する「地球防衛家のヒトビト」の積極性をあらためて強く印象づける。⁴⁴

詳しい作品分析は後続の研究に委ねるが、本論文ではそれら5本のなかに鳩山を批評・風刺する作品が見られる点だけを指摘しておく。もっとも批判的な描き方をしていると考えられるのが2009年7月3日号（図26）の作品で、鳩山の政治資金管理団体の収支報告書に「故人」が個人献金者として記載されていた問題を、怪談を怖がる鳩山を描くことで揶揄している。他の作品の分析や、それら就任以前の作品が就任後の作品とどう関連するかなどは、今後の研究で解明する必要がある。

麻生を示すシンボルでは、画像のみ＝4本、文字のみ＝3本、併用＝7本、と大きな偏りは見られない。過去の首相と比較してまとめた表8を見ても、麻生だけに突出して目立つような特徴は見いだせない。「地球防衛家のヒトビト」にとって、小泉以降の首相のなかで麻生は「もっとも描かれやすい」首相であるが、必ずしも「画像として描きやすい」というわけではないのかもしれない。本論文の中編で分析した「アサッテ君」でも、使用されるシンボルに大きな偏りは見られなかった。いずれにせよ、シンボル使用については解明すべき余地が依然として多く残されていることだけは確かである。今後、研究をさらに積みかさねていくことが必

地球防衛家のヒトビト



図26 2009年7月3日号

表8 「地球防衛家のヒトビト」のシンボル使用（首相別）

| | 画像のみ | 文字のみ | 画像と文字（併用） |
|----|------|------|-----------|
| 小泉 | 16本 | 14本 | 11本 |
| 安倍 | 4本 | 1本 | 6本 |
| 福田 | 2本 | 1本 | 5本 |
| 麻生 | 4本 | 3本 | 7本 |
| 合計 | 26本 | 19本 | 29本 |

須である。

これまでの分析から、もともと他の漫画よりも圧倒的に多く首相を描いていた「地球防衛家のヒトビト」は、麻生の在任期間中にその特徴を強め、よりいっそう積極的に、かつ旺盛な時事性・風刺性をもって首相を描き、かつその描き方も多彩であることがわかった。同じ『朝日新聞』の朝刊で連載されている「ののちゃん」が、1度も首相を描かなかったのとはきわめて対照的である。「ののちゃん」が意図的な「しらんぷり」で政治問題に無関心を装っているのに対し、「地球防衛家のヒトビト」は果敢に政治家や政治問題を取りあげ、かつ批判的に論じようとしている。同じ掲載紙の朝刊と夕刊で見られるこのコントラストは、麻生の在任期間中にその明瞭さを増している。

また、先行研究が特徴づけているように、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることも、本論文であらためて確認することができた。ナレーションを用いた作品（図23）が象徴しているように、政治批評・風刺を積極的に展開し、かつ作者自身の見解を比較的にはっきりと示しているからである。これは「地球防衛家のヒトビト」だけに見られる独自性である。登場人物が実に饒舌に首相を批評・風刺することや、1コマの政治風刺漫画のように架空の首相を滑稽に描く作品が多いことも、「自己主張型」の特徴を補強している。

加えて、麻生の在任期間中にすでに「次期」首相である鳩山由紀夫を5本もの作品で描いている事実を考慮すると、連載がはじまった小泉政権時からつづく上述の特徴は今後も継続、いやさらに強まっていくとさえ予測できる。歴史的な政権交代で麻生から首相の座を奪った鳩山、その後任の菅直人と野田佳彦、さらにそれ以降、「地球防衛家のヒトビト」が首相をどのように描いていくのか、継続的に考究していく必要がある。

最後に、現職ばかりか歴代や後任の「首相」まで登場させ彼らを果敢に風刺・批判している点、そして「自己主張型」と特徴づけられる点で、「地球防衛家のヒトビト」はジャーナリズムの権力監視・番犬機能を意識的に発揮しようとする4コマ漫画だといえる。先行研究も指摘しているように、作者のしりあがり自身もそのことを認めている。たとえば、2004年の『朝日新聞』のインタビューで彼は、「もう少しシマな世の中にしなくちゃって、今、みんな考えてるんじゃないか。気持ち的には、正義の味方のマフラーを巻いてる。でも、どうしたらいいかわからない。そういうヒトビトの代表のつもり、かな」と語っている。その4年後に出版したエッセー集でも、「自分の笑いは『覚醒』」、

つまり権威や権力を引きずり降ろすような「プラスの価値をリセットする」諧謔^{かいぎよく}であるとしている。作者は同じエッセー集で、「新聞に載る四コママンガやちょっとした時事ネタのカットを描くとき、それぞれの事件に対する『人並み』の反応を探す」とも書いているが、この姿勢は一般庶民に代わり権力者の言動に目を光らせる、つまり原初的なジャーナリズムの権力監視・番犬機能に通じるものだといえる。⁴⁵

4 結論 分析・知見の総括

本項では、先行研究と比較しながらこれまでの分析から得た知見を総括し、今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能について若干の考察を加える。

まず、本論文の前編で全体像を把握するために量的な側面を分析したところ、特筆すべき知見として以下のような諸点を見いだすことができた。

- ・首相を描く漫画と描かない漫画とのへだたりが、小泉・安倍・福田の在任期間中よりもさらに拡大している。麻生を描いているのは「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）だけで、それ以外の漫画では1度も描かれていない。

- ・頻度を基準にすると、前任の3人の首相と比べ麻生はもっとも「描かれやすい」首相である。これは、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」がもっとも頻繁に麻生を描いたことを意味している。

- ・新聞別では『朝日新聞』・『毎日新聞』・『読売新聞』の順で多く（『読売新聞』は0）、朝刊よりも夕刊の漫画がより頻繁に首相を描いている。ただし、首相を描く漫画と描かない漫画が完全に分離しているだけに、その解釈には慎重を要する。

- ・内閣支持率が低下・低迷しつつある一方で、麻生は在任期間を通じて比較的にまんべんなく描かれているが、この特徴は過去の首相の誰とも異なる。小泉は空前の高支持率を記録した「絶頂期」（首相就任初年）にもっとも多く描かれ、安倍と福田は突然の辞任表明前後に集中して描かれていた。

- ・新聞4コマ漫画が首相を描く多寡に影響を与えるのは、支持率の高低よりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである、という先行研究が示した仮説は麻生にも十分に当てはまる。自身の言動がくり返し不評を買い、かつそれが一因で人気低下しつつあるなかで、社会的注目度がいっそう増し、過去の首相の誰よりも「描かれやすい」首相になったと考えられるからである。

- ・しかし、麻生を描く漫画と描かない漫画がはっきりわかれた事実にかんがみれば、上述の仮説は時事的な「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」にはよく当てはまるが、他の家庭的な漫画には必ずしも適合しない。この点を含め、支持率や社会的注目度と「描かれやすさ」の関係は今後も継続的に検討していく必要がある。

- ・文字よりも画像（似顔絵）の使用がやや多いが、シンボルの偏りはあまりない。

中編・後編でおこなった質的な分析では各4コマ漫画の首相描写の特徴を明らかにしたが、全体を総括すると、以下に示すような共通点や傾向、あるいは仮説を見いだすことができた。なお、冒頭に「*」がついている諸点は先行研究と重複するもの、「†」がついているものは本論文で新たに得られた知見である。

- * 首相が登場する作品でも、ほとんどの場合、作中の中心的役割は主要登場人物など無名の一般庶民がになう。1コマの政治風刺漫画とは異なり、首相が主人公として単独で描かれる作品はほとんどない（麻生の在任期間中は皆無）。
- * ただし、現実にはありえない架空の状況設定で首相を揶揄する作品は一定数あり、この点では1コマ漫画との類似性が見られる。
- * 首相はしばしば新聞やテレビなどマス・メディアの報道対象として描かれ、登場人物はそれを通して首相を語る。
- * 首相に対する風刺・批判は、ほとんどの場合、登場人物を通して語られる。
- * 首相を賛美・称賛するような作品は皆無である。
- * 新聞4コマ漫画にもジャーナリズムの権力監視・番犬機能の一部をになうものがある。

† 過去の首相に比べ、麻生を描いた作品には批評性・風刺性の濃い作品が目立つ。この理由として、高級ホテルのバー通いや漢字の誤読などが社会の耳目を集め、かつそうした言動が批評・風刺する題材として適していたことが考えられる。

† 「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」が首相に就任する^{い、}以前から麻生を批判的な文脈で描いている事実は、麻生に限らず4コマ漫画の首相描写を十全に理解するためには、就任以前にさかのぼる連続的な流れを把握する必要があることを示す。

上述の諸点とは別に、本論文の知見は、家庭的4コマ漫画の首相描写に関する仮説にも新たな論点をつけ加える。先行研究が提示したその仮説は、家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」、というものである。

新たな論点とは以下に示す3つであるが、いずれも仮説をより精緻化していくために、また首相の「描かれやすさ」「描かれにくさ」を決定する要因を解明するために、今後も継続的に検討すべき重要な課題を含んでいる。ただし、麻生の在任期間中、家庭漫画は首相を1度も描いていないため、これらの論点は仮説の蓋然性をただちに揺さぶるものではない。

・仮説で説明できるテーマの範囲には一定の制約があり、かつ漫画によっても題材とされるテーマは異なるかもしれない。

- ・各漫画にはそれぞれ取りあげられやすい特定のテーマがあるかもしれない。
- ・マス・メディアで大きく報道され社会で注目されたとしても、家庭的な漫画と時事的な漫画とでは取りあげられるテーマに差があるかもしれない。

次に、先行研究が示した新聞4コマ漫画のタイプわけについても、上述の知見をふまえ若干の考察を加える。先行研究は、首相描写の頻度や方法を基準に、新聞4コマ漫画を以下の4タイプに大別している。

- ・純家庭的4コマ漫画 家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わないタイプで、「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）と「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）がこれにあたる。
- ・家庭的4コマ漫画 基本的に上のタイプと同じであるが、まれに政治家や政治問題を扱い、かつ鋭い批評・風刺をすることもあるタイプで、「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）がこれにあたる。
- ・時事的4コマ漫画（世論反映型） 政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱うが、作者自身の政治的見解やメッセージをぶつけるというよりは、もっぱら庶民の間で共有されているであろう社会の一般認識や感情を反映するタイプで、「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）がこれにあたる。
- ・時事的4コマ漫画（自己主張型） 政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱い、かつ作者自身の政治的見解やメッセージを比較的是っきりと表現するタイプで、「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）がこれにあたる。

なお、それぞれのタイプは互いに完全に排他的ではない。

まず、もっとも重要な点として、麻生の在任期間中の作品を見る限り、上のタイプわけを変更・修正する切迫した必要性は認められない。「ウチの場合は」と「コボちゃん」は首相を1度も描いていないため、「純家庭的4コマ漫画」のままでよい。「アサッテ君」では過去の首相と比べ批評性・風刺性のある作品が目立ったが、人気低迷に苦しむ首相に対する一般的な市民感情を反映した結果だと考えられるため、「世論反映型」という分類がふさわしい。「地球防衛家のヒトビト」は、作者自身のナレーションを使った作品が集約的に示すように、ひきつづき「自己主張型」として特徴づけられる。

ただし、「ののちゃん」を「家庭的4コマ漫画」に分類することについては、今後の研究次第では修正・変更を余儀なくされる可能性がある。小泉政権時には少数ながらも首相を鋭く風刺する作品があったが、それが安倍・福田、さらに麻生の在任期間中にはまったく見られなかったからである。安倍・福田・麻生の3人を1度も描いていない点だけに着目すれば、「ののちゃん」は「ウチの場合は」と「コボちゃん」よりもなお「純家庭的4コマ漫画」らしい。しかし、作者のいしいひさいちは、本来は時事問題に関心が高いにもかかわらず、「ののちゃん」では意図的に政治問題を避け、家庭的な作風に徹していると考えられる。つまり、今後ふたたび首相を風刺するような作品を描く可能

性は皆無ではない。実際、本論文執筆時点までにいいは少なくとも1本の作品(2010年4月21日号、No.4533)で鳩山由紀夫首相を描いている。この事実は、「ののちゃん」の首相描写には解明の余地がなお多く残されていることを示している。そのため、現時点では先行研究にならない「家庭的4コマ漫画」のままにしておくが、後続の研究結果によっては分類を見直す必要がでてくるかもしれない。

いずれにせよ、小泉から麻生の事例研究だけで類型化を確定できるわけではない。今後も継続的に研究をかさねることで、新聞4コマ漫画による首相描写の理論化・体系化をよりいっそうすすめる必要がある。とくに、衆議院総選挙(2009年8月30日に執行)に勝利し、民主党の政治家としてはじめて首相に就任したもののわずか8ヵ月強で辞職した鳩山由紀夫、およびその後継者である菅直人と野田佳彦に関する事例研究は、本論文を含む先行研究と比較考察する上できわめて優先順位の高い研究課題である。彼ら民主党の首相については、分析結果がまとまり次第、本誌で順次発表していく予定である。同時に、小泉以前の首相についても同じ方法で分析ができれば、より多様な論点が浮かびあがるかもしれない。

最後に、新聞4コマ漫画とジャーナリズムの権力監視・番犬機能の関係について若干の考察を提示して、本論文を締めくくる。

まず、いくら麻生が「描かれやすい」首相であったとしても、3大全国紙の4コマ漫画全体を俯瞰すれば、首相を描いた作品はわずか1.38%(1,593本中22本)にすぎず、しかも3つの家庭漫画では1度も描かれなかった事実は、努めて冷静に受けとめておく必要がある。そうしないと、首相を描いた一部の漫画・作品ばかりに目を奪われ、実態からかけ離れた過大な評価を下してしまいかねない。

しかし、かといって新聞4コマ漫画がジャーナリズムの権力監視機能と無関係かということ、けっしてそうではない。麻生首相は、自身の不用意な言動も一因で支持率を失いつづけた末、安倍・福田よりもさらに短期間で最高権力者の地位から退いた。内閣支持率でも、麻生は小泉・安倍・福田を下回った。そんな麻生を過去の首相の誰よりも頻繁に描いている事実は、たとえ「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」に限定されるにせよ、新聞4コマ漫画が一般的に思われている以上に国の指導者の挙動に目を光らせていることを示している。

しかも、その視点・観点には、他の報道形態(1コマの政治風刺漫画も含む)には見られぬ独自性がある。1つとして、新聞4コマ漫画の主役は子供を含む無名の一般庶民であり、作者は彼らの目や口を借りる形で首相を描いている。つまり、政治的な力をもたないごく普通の市民を代表して権力者の言動を監視しているといえ、これこそ原初的なジャーナリズムの番犬機能だといえなくもない。

さらに、市井の市民がマス・メディアに報道される首相を見る・語る、という構図が多用されていることも刮目に値する。新聞というマス・メディアの内部にありながら、新聞を含むマス・メディアを相対化・客体化し、読者により近い立場で首相を批評・風刺していると考えられるからである。権力者を監視すべきマス・メディア自体が権力化しているという批判がなされる今日、マス・メディアと読者を橋わたしするような4コマ漫画の視座は貴重である。

ごく最近では、政治家や政治問題を論評する手段として4コマ漫画が定位置以外の場所で活用される事例が見られるが、これは上述のような政治コミュニケーションとしての新聞4コマ漫画の特性がより顕在化する傾向にあることを示唆しているかもしれない。一例として、2009年8月の総選挙を前に、『朝日新聞』（8月19日号）は4コマ漫画特集「笑う総選挙」を組んだ。全国紙のオピニオン面に8本の4コマ漫画だけ（文章どころか、作品の解説さえない）が掲載されるのは異例である。もちろん、そのなかにも首相を描いたものがある。さらに、『朝日新聞』は選挙当日（8月30日号）のオピニオン面にも1本の4コマ漫画を掲載している。このことは、政治家や政治問題を論じる上での4コマ漫画の特性があらためて評価されつつあることを示しているかもしれない。若者の「新聞離れ」を食い止めるという意味あいも含め、政治家や政治問題を論じる上で、将来、4コマ漫画が「新聞紙面の片隅」から、「新聞紙面そのもの」として位置づけられる可能性もあろう。⁴⁶

27 小川雪「行こうののちゃんの町へ」『朝日新聞』2009年5月5日。

28 「ののちゃん5000回へ 一家の日常 風刺の隠し味」『朝日新聞』2011年8月9日、「朝のクスッと20年」『朝日新聞』2011年10月12日。いしいの病気療養のため、2009年11月21日号の作品（No.4882）を掲載後、「ののちゃん」は2010年2月いっぱいまで休載している。同年3月1日号から再開した。

29 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、12。いしいの著作歴については、山野博史「いしひさいち著書目録」『関西大学年史紀要』第15号（2004年3月）：1～52が詳しい。

30 山口「4コマ漫画」、夏目・竹内編・著『マンガ学入門』13。

31 いしひさいち『『しらんぷり』基本に』『朝日新聞』2005年9月20日。

32 「朝のクスッと20年 デッチあげインタビュー第38回」『朝日新聞』2011年10月12日。本論文執筆時点で、菅直人と野田佳彦を描いた作品は確認できていない。

33 「新連載マンガ『地球防衛家のヒトビト』 来月1日から」『朝日新聞』2002年3月25日夕刊。

34 麻生を描いた14本は、以下の号に掲載されている。2008年10月25日号、2008年11月1日号、2008年11月15日号、2008年12月9日号、2008年12月13日号、2009年1月30日号、2009年2月21日号、2009年3月12日号、2009年5月25日号、2009年6月16日号、2009年7月2日号、2009年7月15日号、2009年7月17日号、2009年7月22日号。

35 「地球防衛家のヒトビト」における麻生の「描かれやすさ」を説明する上で、単純に麻生の外見が「描きやすい」ことを一因としてあげることが、あながち荒唐無稽ではない。なぜならば、安倍の辞任表明から3日後の2007年9月15日号の作品で、「次の首相」は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と願う「某漫画家」が描かれているからである。この「某漫画家」が作者自身であることに疑問の余地はない。しかし、外見による「描きやすさ」はすぐれて主観的な要素であるため、十分に論理的・実証的な説明をするためには、上の作品だけでは材料不足である。「地球防衛家のヒトビト」で使用されているシンボル（表8）を見ても、画像（似顔絵）のみ＝4本、文字のみ＝3本、画像と文字（併用）＝7本で、いちじるしく画像が多用されているわけではない。

36 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、174。

37 鶴岡正寛『『3年後』明記せず 消費増税で与党大綱』『朝日新聞』2008年12月10日。

38 麻生を描いているわけではないが、2009年8月6日号の作品は小泉・安倍・福田の3人を同時に登場させ、さらに小泉の前任者である森喜朗らしき人物も描いている。

39 『『首相早期辞任を』71% 本社世論調査 内閣支持13%』『朝日新聞』2009年2月21日。これらの作品のほか、2009年1月30日号の作品も麻生をアメリカのオバマ大統領と一緒に描いている。ただし、この作品ではテレビのニュース報道として、「麻生首相がオバマ大統領と電話で会談しました」と文字で表現しているにすぎない。補足として、2009年3月12日号の作品では、麻生と2人でならぶ写真を選挙用ポスターに使うか迷っている立候補者とおぼしき男性が描かれている。しかし、その男性が具体的にどの政治家か特定できないため、

第2の表現パターンが使われているとは断言できない。

- 40 補正予算に対しては、「時時刻刻 水膨れ補正 揺らぐ財政」『朝日新聞』2009年4月10日など多くの報道で批判が加えられている。
- 41 これらの作品のほか、2009年7月2日号と2009年7月22日号の作品（図23）でも第3の表現パターンが使われている。前者では、記者たちに囲まれる「ぶら下がり取材」で「マイケル・ジャクソンは実は生きている」という風説について尋ねられた首相が、「え〜〜？」と困惑している。後者（図23）は、第4の表現パターンが使われている事例として本文中で詳しく分析する。また、注39で言及した2009年3月12日号の作品にも、第3の表現パターンが使われているといえなくもない。
- 42 麻生が登場するわけではないが、2008年9月12日・13日号の作品でも自民党総裁選、およびその立候補者が批判的に描かれており、次の首相になる人物が就任以前から批評・風刺の対象とされていたことがわかる。
- 43 本論文執筆時点で、首相辞任後に麻生を描いた作品が1本だけある。2010年7月1日号の作品がそれで、同年7月11日に執行される予定の参議院選挙を題材として、炎天下で演説する小泉・安倍・麻生の3人を描いている。この作品は4コマ目でトーサンが「もう選挙は夏の風物詩だね…」とつぶやいて終わるが、特段、彼ら首相経験者を皮肉る内容ではない。
- 44 鳩山を描いた5本は、以下の号に掲載されている。2009年5月15日号、2009年5月20日号、2009年7月3日号、2009年9月9日号、2009年9月11日号。追加的に、注38で指摘したように、2009年8月6日号の作品では小泉の前任者である森喜朗らしき人物も描かれている。
- 45 河合真帆「しりあがり寿さん『僕の分身』 連載『地球防衛家のヒトビト』本に」『朝日新聞』2004年6月22日、しりあがり寿『人並みといふこと』（大和書房、2008年）、65、202。
- 46 「オピニオン 笑う総選挙」『朝日新聞』2009年8月19日、「オピニオン 一票かく投じる」『朝日新聞』2009年8月30日。

麻生太郎内閣の略年表

在任期間 2008年 9 月24日～2009年 9 月16日（358日）

2008年（平成20年）

- 9 月24日 第92代首相に指命。内閣発足。
- 9 月25日 国連総会で演説。
- 9 月28日 日本教職員組合などに関する発言で中山成彬国土交通大臣が辞任。
- 9 月29日 国会で所信表明演説。
- 10月26日 東京・秋葉原で就任後初の街頭演説。
- 10月30日 記者会見で「詳細」（しょうさい）を「ようさい」と誤読。
- 11月 7 日 参院本会議で「踏襲」（とうしゅう）を「ふしゅう」と誤読。
- 11月11日 生活支援定額給付金実施本部を設置。
- 11月12日 日中青少年友好交流年閉幕式のあいさつで「頻繁」（ひんぱん）を「はんざつ」、「未曾有」（みぞう）を「みぞゆう」と誤読。
- 11月14・15日 金融サミット（G20）。
- 11月28日 小沢一郎民主党代表と党首討論。

2008年中の首相の主な発言

- ・たくさんの人と会うときにホテルのバーってというのは、安全で安いとこだという意識がほくにはあります。（10月22日）
- ・医師は社会常識がかなり欠落している人が多い。（11月19日）
- ・たらたら飲んで、食べて、何もしない人（患者）の分の金（医療費）を何で私が払うんだ。（11月20日）
- ・（再就職の相談に来た若者に対して）目的意識をはっきりだすようにしないと就職というのは難しい。（12月19日）

2009年（平成21年）

- 1 月11・12日 韓国訪問。
- 1 月13日 渡辺喜美行政改革担当大臣が自民党を離党。
- 1 月28日 国会で施政方針演説。
- 2 月14日 主要7ヵ国財務相・中央銀行総裁会議（G7）に出席した中川昭一財務・金融担当大臣がもうろう（酩酊）記者会見。
- 2 月17日 中川財務・金融担当大臣が辞任。後任は与謝野馨経済財政担当大臣（兼任）。

2月17日 米国訪問。

3月4日 定額給付金の財源（総額2兆円）を確保するための2008年度第2次補正予算関連法案が成立。

4月1・2日 第2回金融サミット（G20）。

4月5日 北朝鮮が「ミサイル」発射実験（北朝鮮は「人工衛星」と主張）。

4月28日 新型インフルエンザ対策本部を設置。

4月29・30日 中国訪問。

5月3～5日 欧州諸国訪問。

5月16日 民主党代表に鳩山由紀夫が選出。

6月12日 鳩山邦夫総務大臣が辞任（事実上の更迭）。

7月1日 内閣改造。経済財政担当大臣に林芳正を起用。

7月8～10日 ラクイラ（イタリア）サミット。

7月12日 東京都議会選挙。自民・公明両党の議席が過半数を割り、民主党が第1党。

7月13日 衆議院の解散・総選挙の日程を自民・公明両党の幹部と決定。

7月21日 衆議院解散。

8月9日 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のあいさつで傷跡（きずあと）を「しょうせき」と誤読。

8月12日 鳩山由紀夫民主党代表と党首討論。

8月30日 衆院総選挙。自民党の歴史的な大敗（自民党119議席、民主党308議席）。

8月31日 自民党総裁辞任を表明。

9月8日 鳩山由紀夫民主党代表と政権引き継ぎのため会談。

9月16日 麻生内閣総辞職。鳩山由紀夫が第93代首相に指名。鳩山内閣発足。

2009年中の首相の主な発言

・高齢者は働くことしか才能がない。80歳を過ぎて遊びを覚えても遅い。（7月25日）

【Abstract】

Prime Minister Taro Aso in Newspaper Comic Strips (Part 3):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2008–2009

Takeya Mizuno, Tomomi Fukuda, Juri Kinomura, Toshiyuki Shiga,
Omoi Sugawara, and Kazuki Chida

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Taro Aso during his tenure, from September 24, 2008 to September 16, 2009.

As the last installment of a three-part series, this article (Part 3) analyzes qualitatively how *Asahi*'s “Nono Chan” (Little Nono) and “Chikyu Boei Ke no Hitobito” (The Earth-Saver Family) depicted Prime Minister Aso.

At the end, this article sums up the findings of the entire series and presents conclusions.